



GOOD NEWS ときのかえ

War Cry

3月号

福音版

2021

March

No.2814

二〇二一年 三月一日発行

明治二十八年創刊

福音版・毎月一日発行

広報版・奇数月十五日発行(除く七月)

十年、人々に寄り添う支援を

樋口和光

二〇一一年三月十一日に起こった東日本大震災から十年となります。

東日本大震災と呼ばれる

ほど、その破壊力は広範囲に及びました。特に津波による被害は甚大で、沿岸にある多くの町々を飲み込み、家も船も職場もそして、尊

い命を奪いました。人々が喪失感に打ちのめされている中、救世軍の被災地での支援が始まりました。

私は震災当日、東京・神田神保町にある救世軍本営(本部)の三階フロアで、震度五強の揺れを初めて体験しました。都内はすぐに交



通手段が麻痺し、行き場を失った帰宅困難者が本営前の白山通りにもあふれました。そこで、すぐに休憩所として、一階ホール(礼拝堂にあたる)を開放しました。温かい飲み物や携帯電話の充電を提供しながら、正面の大スクリーンに交通情報や鉄道再開などのテレビの情報を映し出しました。地図をプリントして道案内もしました。夕食と朝食の提供もなされ、翌朝までに五百人強の人々が利用し、帰宅困難となった六十人ほどの方が宿泊しました。

また私は、すぐに他のスタッフ二人と共に、被災した仙台小隊(教会にあたる)に、水と食料を届ける任務を得ました。都内の渋滞が解消するのを待って、救援物資を積んだ車で一般道を走り、十六時間かけて仙台に到着しました。それは、仙台小隊を救援活動の拠点とするためでした。

援として、全国各地から救世軍のチームが、岩手、宮城、福島県で給食支援をおこない、日用品を届けました。救世軍の給食車(キャンティンカー)で提供した温かい食事数は一万七千食以上となりました。また、避難先として、みなし仮設住宅に入居したことで支援が受けられない人たちに、行政と協力して、暖房器具などを贈る個別の支援もしました。これらの支援には、世界各地の救世軍から資金や物資の提供がありました。やがて、復興支援がなされる中、私は、宮城県の南三陸町と女川町の商店街の再出発のイベントに参加する機会を得ました。南三陸町の「さんさん商店街」は、大雪の中の再スタートでしたが、ビデオカメラを持参し、復興の様子を記録しました。女川町での「きぼろのかね商店街」開設イベント時、これらの商店街の復興のために資金面で多大な支援をした、米国救世軍の総司令官が来日して語った言葉を忘れることができせん。「皆さんが救世軍を必要とされるなら、救世軍はここにどまります」と。大きな試練を経験している人々に、救世軍が寄り添うことによって、微か

も希望の光を点すことができることを示しました。個人的なことですが、私の孫の希歩は、宮城県石巻市で、二〇一六年六月に生まれました。彼の両親である息子夫婦は、その年の四月、被災地の復興支援スタッフとして女川町に赴任しました。子どもが被災地で生まれることに意味があると母親も大きなお腹で引越したのです。生まれた子どもの名前には、「きぼう(希望)のかね商店街」の一字が入っています。次の聖書の言葉を思い出します。「わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。あなたたちがわたしを呼び、来てわたしに祈り求めるなら、わたしは聞く。」(エレミヤ書29章11、12節)

現在、被災地では災害に備えた街づくりがなされていますが、仙台にある救世軍は、今も支援の拠点として、人々と繋がり、寄り添い、将来と希望を与えてくださる神に祈りつつ、支えるための働きを続けています。(救世軍士官(伝道者))



きずな めぐみ ※ 絆フレンズ・恵プロジェクト

スタッフ

カランドリア・みゆきさん

<プロフィール>

宮城県女川町出身。2011年の震災をきっかけに、「一度きりの人生、悔いのないように」とオーストラリアに渡り英語を学ぶ。帰国後、宣教師夫妻が運営する長期復興支援団体「絆フレンズ」に出会い、スタッフとなる。「絆フレンズ」は、震災の2週間後に宮城県石巻市に入った宣教師夫妻が、避難所ではなく、自宅で避難していた方々への炊き出しや物資支援から始まった。宣教師夫妻は、コミュニティの必要性を覚え、団体を立ち上げて交流の場を設けた。

その後、宣教師夫妻が女川町を拠点に開始した「恵プロジェクト」に2016年7月からみゆきさんもスタッフとして参加。現在に至る。右のQRコードから「恵プロジェクト」の働きを御覧いただけます。



東日本大震災は、多くの人の命と日常を奪いました。あれから十年。一步一步踏みしめた復興の歩みで生み出されたものの一つが、堅固な「絆」ではないでしょうか。その名も「絆フレンズ」との出会い、神様との出会いについてお話をうかがいました。

二〇一一年三月十一日、「これは現実
に起こっている出来事だろうか」と

その日は、女川町内にて勤務しておりました。これまで体験したことのない、強くて長い揺れが起こり、何が起きているのか分からない戸惑いの中、皆と勤務先の敷地内の高台に避難し、建物の安全が確認されるまで、通勤用のバスの中に待機していました。社屋に戻ると電源が非常用のものに切り替わっており、テレビを観ることができたのですが、次々と映し出される破壊された建物、津波の様子などを観て、これは現実起こっている出来事だろうか、夢でも見ているような感覚でした。その職場は、すぐに地域住民の方に避難所として開放された

ので、それから数日、配食などのお手伝いや施設の清掃などをして過ごしました。震災から四日目の朝、ようやく家に帰ることができました。我が家は高台にあったので無事であろうと思っただけでしたが、連絡手段が完全に断たれており、父と母と愛犬の安否が確認できないままでしたので、家にいるかどうか心配していました。家の玄関を開けると、両親と一匹が私を出迎えてくれ、本当の意味で安堵しました。その日の午後、女川町内に出た時に見た、変わり果てた町内の様子には言葉も出ず、ただただ呆然と立ち尽くすしかありませんでした。

「一度きりの人生、悔いのないように」 との決断から日本語教師へ

震災後、「一度きりの人生、悔いのないように生きよう」という母の言葉をきっかけに、オーストラリアのシドニーで英語を勉強する。震災後、「一度きりの人生、悔いのないように」の決断から日本語教師へ。震災後、ワーキングホリデービザを利用して、渡豪しました。そして一年後に帰国し、石巻市に住む外国人の方のための日本語教室に講師として参加しました。そこに生徒として来ていた宣教師の紹介で、「絆フレンズ」のアンディさんとローナさん夫妻と知り合いました。その後、まず日本語教師として「絆フレンズ」に参加し、次第に、それまでに身につけていたスキルを用いて経理や広報、英会話教室の運営といった業務が増えていき、一年経つ頃にはすっかりスタッフになっ

ていました（笑）。私の家は、仏教徒であり、神棚も家にあるようなごく一般的な日本の家庭だったのですが、もともと世界の宗教に興味がありました。キリスト教もその中の一つだという認識でした。震災後、クリスチャンのボランティアの方々が来て働いてくださっていました。アンディさんとローナさんもそうでしたが、そのような方々とふれあう時間をもつうちに、「クリスチャンの人たちはどうしていつも穏やかで、明るくて前向きで、人生を楽しんでいるんだろう……」と不思議に思うようになっていました。しかし私の中では、「クリスチャンがイグイ勧誘してくる」という、誤ったイメージがあったので、「絆フレンズ」で働き始める時にも、気をつけなくては、と思っていました。しかし「敵に勝つには、まずは敵を知れ」と思って、キリスト教についての本や漫画を読み始めました。「敵」という表現、今となっては笑ってしまいますが、まず怪しんだことが、知ることにきっかけでした。



ローナ・ギルバートさんと、アメリカ・シカゴでの「恵プロジェクト」の販売会の時に（2018年）

アンディさんとローナさんという心の支えを失って

「絆フレンズ」は、二〇一四年五月に、女川町での「恵プロジェクト」を開始しました。それは、日本の古着の着物をリサイクルして製品にして販売する働きで、女川町の女性たちに雇用とコミュニティを提供する場となりました。トレーラーハウスを利用して、裁縫初心者女性も和気あいあいと集まって製品をつくるようになりました。

ところが、二〇一九年七月にアンディさんとローナさんがアメリカへ帰国されたから、私の心の大きな支えがなくなってしまったことに気づきました。そのような不安を覚える中、宮城県大衡村にある東北中央教会から、教会スタッフの黒田広輝さん・愛希子さん夫

妻が「恵プロジェクト」のお手伝いに来てくださることになりました。クリスチャンということで、不思議なのですが、無条件で安心したのを覚えています。この頃から、急速に信仰の道へと導かれ始めました。

「恵プロジェクト」では、毎朝、分かち合いの時間をもっています。それぞれあったことを語り合ってそれぞれの心や家族の様子を知る大切な時間です。その年の八月には、「恵プロジェクト」の夏休み中に、救世軍仙台小隊（教会にあたる）の栗飯原由美子さん（救世軍士官・伝道者）と一対一で分かち合いをする機会が与えられました。その時、聖書の箴言と出合いました。その時に教えていただいた

聖書の言葉は、私の心にピンポイントで響き、もっとクリスト教を学びたいと思いはじめました。

その後九月二十日から、黒田さん夫妻が「絆フレンズ」のお店で、「アルファコース」という信仰入門のための学びをスタートしてくださいました。その学びに参加する中で、「祈り」について学んだ後から、毎日お祈りするようになりしました。実は、このアルファコースが始まる前、一人の男性と知り合いました。この人が、現在の夫ジョセフです。彼は強い信仰をもったクリスチャンで、クリスト教について多くのことを教えてくれました。私は彼に好意をもち始めていたので、彼のことも合わせて祈るようになりしました。「神様の御心でなければ、どうか彼を遠ざけてください」

と。そんな祈りとは裏腹に、彼が英会話教室を手伝ってくれるようになるなど、どんどん近い存在となっていました。

そして十一月十六日の早朝、これまで神様がしてくださった御業を振り返り、〈もう神様に抗うのはやめよう。すべて神様の御手にお委ねし、この人生を共に歩もう〉と思い、アメリカのアンディさんとローナさんに、ビデオ通話で信仰告白をしました。その後、ジョセフと結婚を前提にお付き合いを始めました。

そして二〇二〇年三月十五日に、ちょうど震災を覚えて来日していたアンディさんから、洗礼を授けていただきました。

さらに翌週の二十二日には、結婚式をすることができました。父はすでに他界していたので、アンディさんにバースンロードを共に歩いていただき、洗礼から結婚式、と喜びあふれる、素晴らしい信仰生活をスタートすることができました。

ここに至るまで、本当にたくさんのクリスチャンの方々が携わってくださいました。それらの皆さんから何度も何度も時かれた福音の種のおかげで、私は救われました。

神様が用意してくださる最善の道を喜びと共に歩んでいきたいです

信仰をもつまでは、〈何か問題が起きた時には、自分がこれまで経験してきたことや知識の中でどうにかしよう〉ともがいていました。そのような時は本当に辛く、まるで暗闇の中を一人きりで歩いているような感覚がありました。けれども、クリスト教と出合い、聖書の言葉を学ぶ中で〈神様の御業に勝るものはない、だから自分の力で何とかしよう〉と頑張る必要はないんだ〉と思うようになりました。

東日本大震災から今年は十年です。たくさんの方々からの支援のおかげで、被災地・女川町は、「新しいスタートが世界一生まれる町へ」というスローガンのもと、復興してきました。新型コロナウイルス感染症で、今は大変な時期ですが、落ち着いたら、これまでの女川の町の軌跡を御覧になるために、ぜひ女川へ足をお運びください。

私も自身も、「絆フレンズ」の「恵プロジェクト」のスタッフそれぞれがもつ賜物を生かして、女川町の新しい魅力を発信していきたいと思っています。そして、今までアンディさんとローナさんがしてきたように、神様の御手にすべてお委ねし、導きを乞いながら、神様が用意してくださる最善の道を、喜びと共に歩んでいきたいです。

「恵プロジェクト」の商品の箸セット↓



写真上より
・アルファコースを導いてくださった黒田さん夫妻（左から二人）に、アンディさんに信仰告白をしたことを告げた記念に・結婚式にて。アンディ・ギルバートさん（中央）とジョセフ





世界をみつめて

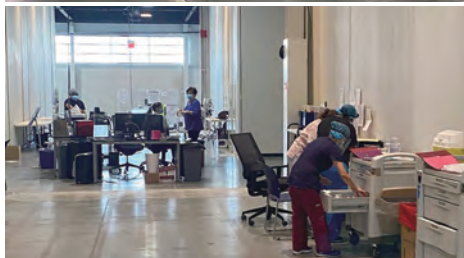
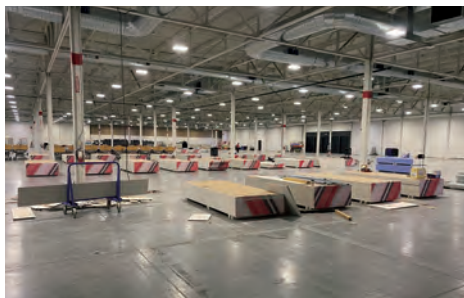
〈カナダ〉新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の影響下での支援

カナダで最も人口の多いオンタリオ州は、1月14日から2度目の緊急事態宣言を発令しました。救世軍トロントグレースヘルスセンター (TGHC) は、州政府と協力し、「トロントコングレスセンター」(会議及び展示施設) に仮設の専門医療センターを設置しました。

現在、感染拡大に伴い、適切な介護環境を維持するために一時的に移動しなければならない介護施設居住者のため、30床のベッドを設置しました。

TGHCは、このためにカナダ保健省や地元大学等地域の団体と協力して、必要な医療、事務、支援サービスのスタッフを確保しました。高齢者介護に関して多くの経験と専門知識をもつスタッフが居住者に対応する予定です。

完成時には、最大90人分の家具付きスペースを提供することになります。滞在期間は、個々のニーズや介護施設の状態によって、居住者ごとに異なりますが、24時間体制のセキュリティと医療体制で対応します。



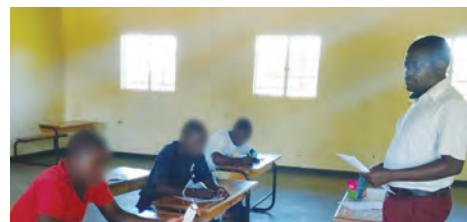
〈マラウイ〉反児童人身取引センターで、支援活動のための研修会開催

コロナ禍で増加する児童人身取引を防止し、子どもたちを救出するためのムチンジ地区での研修会が開催され、市民への予防教育や救出に関する熱心な学びがなされました。(写真上左右)

現在、この施設には8人の子ども



がコロナ対策を講じた安全な生活環境で生活し、学年に準じた教育と職業訓練を受けています。(写真下)



救世軍とは? What is The Salvation Army?

心は神に 手は人に Heart to God, Hand to Man



救世軍は、英国ロンドンに国際本部を置く、世界131の国と地域で活動するプロテスタントのキリスト教会です。1865年、英国のメソジスト教会の牧師ウィリアム・ブースによって始められ、家のない人々、アルコールの悪影響下にある人々、搾取される女性や子どもたちに助けの手を伸べつつ、神様の愛を伝えてきました。

日本での働きは、1895(明治28)年に始まり、伝道の拠点である小隊(教会にあたる)を開設。廃娼運動、失業者対策、病院の設立、児童や女性の保護、アルコール依存症者回復支援など、時代にさきがけて、様々な働きを興してきました。現在の新型コロナウイルス感染症の影響下においても、小隊、社会福祉施設、病院は、感染予防に最大限努力し、活動をおこなっています。

毎年春には、救世軍の国際的な支援活動のために募金運動「克己週間」(3、4月)がおこなわれます。この募金は、救世軍の拠点があるすべての国で取り組まれ、英国の本部を通して、資金困難な地域での様々な救世軍の活動に再配分されます(写真・カナダの募金広告)。

また、日本からの直接支援として、協力関係にある国(バングラデシュ、カナダ、バミューダ地域、コロンビア、コスタリカ、キューバ、ドミニカ、エルサルバドル、グアテマラ、ホンジュラス、ニカラグア、パナマ、ベネズエラ、リベリア、シエラレオネ、マラウイ)のためにも用いられ、昨年日本は、マラウイの反児童人身取引の働き(「世界をみつめて」記事参照)を支援しました。その他にも、協力関係外の国からの要請にも応え、インドネシアの救世軍の建物補修を支援しました。今年は、協力関係国での教育環境支援が計画されています。

Partners in Mission Self-Denial Campaign



救世軍公報 ときのこえ

発行日 福音版/毎月1日、広報版/奇数月15日(除く7月)
定価 福音版/1部40円、広報版/1部100円
クリスマス特集号(12月1日号)/1部100円

発行兼 救世軍

印刷人 代表者 ケネス・メイナ

編集人 寺澤 真由子

発行所 救世軍本営 <https://www.salvationarmy.or.jp>

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17

電話 03-3237-0881(代表)

Mail jpn.editorial@jpn.salvationarmy.org

印刷所 ピーアンドエス



@SArmyJP SArmy_JP The Salvation Army

聖書は新共同訳を使用しています © 共同訳聖書実行委員会 © 日本聖書協会 救世軍は、統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、下記救世軍にご相談ください。

【取り扱い支部】

救世軍への連絡をご希望の方は、以下の項目及び住所氏名をご記入の上、救世軍本営(左記)、もしくは、上記救世軍にご連絡ください。

- ☐ 私の近くの救世軍を紹介してください。 ☐ キリスト教についてもっと知りたいです。
☐ 『ときのこえ』の購読を申し込みます。 ☐ 相談を希望します。